

例の説明が行われた。大学の関連病院においても同様に各科の見学を行った。

キャンパスツアーや市内観光も日程に含まれており、多くの時間を使って現地の学生とのコミュニケーションをとることができた。

【考 察】今回の交流で特に感じたのが次の3点である。

①英語の重要性 ②積極性 ③細かい気配り

英語に関しては学生レベルの交流であれば文法などを気にした会話よりも単語を組み合わせて相手にどのように伝えるかを重視したほうがコミュニケーションを取る上では重要である。

また、日本人の学生が尻込みする中で韓国の学生は積極的に交流を持とうとしてくれるので言葉が通じないとしても積極的に会話をするべきである。韓国の学生、先生方の配慮が特に感じられた。来年以降の国際交流において日本側もしっかり対応できる体制が必要である。

【結 語】2016年慶熙大学国際交流報告を行った。

## 7) 口唇腺唾液分泌量の日内変動

○森 友理恵<sup>1</sup>, 古山 昭<sup>2</sup>, 大須賀謙二<sup>2</sup>

川合 宏仁<sup>2</sup>

(奥羽大・歯学部学生<sup>1</sup>, 奥羽大・歯・口腔機能分子生物<sup>2</sup>)

小唾液腺からの唾液分泌量は総唾液量の8%に過ぎないが、小唾液腺は口腔内に広く分布し、ムチンの含有率が高く、口腔粘膜の保護や嚥下の円滑化に重要な役割を果たすと考えられる。近年では、うま味覚刺激による小唾液腺唾液分泌促進がドライマウス改善に効果的との報告もあり、小唾液腺唾液分泌量を変化させる因子の究明は興味深い課題である。安静時における総唾液分泌量は概日リズムをもって変動する。しかし、小唾液腺唾液分泌量の日内変動に関する知見は少なく、味覚刺激誘導性の小唾液腺唾液分泌については全く研究されていない。そこで本研究では、安静時および味覚刺激により誘導される小唾液腺唾液分泌をヨウ素-デンプン反応を応用した方法で測定し、日内変動の有無を検討した。その結果、安静時の唾液分泌量は午前 ( $0.85 \pm 0.44 \mu\text{l}/\text{cm}^2 \cdot \text{min}$ , mean  $\pm$  SD,  $n=15$ ) において午後 ( $0.45 \pm 0.24 \mu\text{l}/\text{cm}^2 \cdot \text{min}$ ,  $n=14$ ) よりも有意に多かった ( $P < 0.05$ ,

Mann-Whitney U test)。さらに、うま味刺激によって誘導される口唇腺唾液分泌量も午前の方が午後よりも多かったが、興味深いことに、味刺激後の唾液分泌時系列も顕著に異なっていた。午前中(9時~11時)では刺激2分後の唾液分泌量は安静時唾液量の約2倍で、刺激後20分間では唾液分泌量の有意な変化は認められず、唾液分泌の持続的な増加が見られた。一方、午後(15時~17時)では、刺激2分後の唾液分泌量が安静時の約2.9倍と顕著な増大を示すが、刺激8分後には安静時の約2倍、刺激後14分以降では約1.5倍となり、刺激直後と刺激後14分以降とは唾液分泌量の有意な変化が認められ ( $p < 0.05$ , Wilcoxon rank sum test), 唾液分泌量の増加は一過性であることがわかった。

以上の結果より、①小唾液腺唾液分泌量の日内変動パターンは総唾液のパターンとは異なっていること、②刺激唾液分泌の時系列パターンも日内変動すること、の2点が示唆された。

## 8) 本学附属病院総合歯科診療室における歯科用実体顕微鏡の使用状況について

○神庭 一郎, 木村 裕一, 佐々木重夫

佐藤 穂子, 長崎 慶太, 金澤 朋昭

茂呂 有司

(奥羽大・歯・歯科保存学)

【緒 言】医科における実体顕微鏡の使用は1920年代に始まり、歯科領域における使用は1990年代に入ってからであり、主に歯内療法学分野において用いられるようになった。現在では歯内療法学分野のみならず保存修復学、歯周病学、歯科補綴学、口腔外科学分野などすべての歯科治療への利用が模索されている。本学においても2002年9月には附属病院総合歯科診療室に1台が設置され、2008年6月には新たに1台が設置された。

【目 的】本学における歯科用実体顕微鏡(以下、顕微鏡と略す。)の使用状況を知る目的で治療に使用した患者について調査した。

【調査対象および方法】平成27年9月1日から平成28年8月31日までに用いた患者(男性:33名, 女性:72名)における使用部位と回数、診断名

および使用目的を調べるとともに使用者に対して使用感などの項目について質問紙調査を行った。

【結 果】歯内療法学分野において1年間に顕微鏡を使用した総患者数は105名で、使用回数は314回であった。前歯部に比較して大臼歯部に多く使用され、部位では下顎左側第一大臼歯(21.2%)が、診断名では、慢性根尖性歯周炎90例(77.0%)が最も多かった。使用目的では穿孔部確認・処置や根管充填材除去、破折器具除去で高率を示すなど、使用頻度は過去の報告に比べ高く、多種多様の症例に使用されていた。使用経験年数では1～3年未満、10年以上の者が、28.6%と高率を示した。質問紙の「顕微鏡を用いた治療と学生教育との関わりをどう思われますか?」の問いには「今後、積極的に取り入れようと思う」71.4%と高率を示した。学生教育においても顕微鏡を用いた治療を今後積極的に取り入れたいという意見が多かった。

【考 察】大臼歯部は直視で見づらく、ミラーテクニックの使用においても限界があるため、前歯部に比較して顕微鏡使用の必要性が高くなったことが考えられた。過去の報告と比べて穿孔部確認・処置や根管充填材除去、破折器具除去に多く用いられ、「肉眼での対応が困難な治療が顕微鏡を使用することによって可能になる」、「今後は他の治療でも使用したい」との回答が多く、今後のさらなる使用が期待された。使用経験年数では1～3年未満、10年以上の者が高く、顕微鏡が使用しやすい環境であり若手の者がスキルアップしやすい環境だと考えられた。また、顕微鏡を使用した治療の利点の認知が広まったことも一因と考えられた。使用に際して難しいと感じた回答も多いことから、今後さらなるスキルアップが課題であり、患者の顕微鏡に対する理解が重要だと思われた。学生教育との関わりについて、「必要である」との回答が多く認められ、平成26年版の歯科医師国家試験出題基準においても「顕微鏡を用いた歯内療法」が明記されている。また、近年の歯科医師国家試験においてもいくつか出題されており、今後とも学生教育に取り組んでいくべき内容であることが示唆された。

【結 論】顕微鏡を使用した治療の利点が認知さ

れ使用頻度が高まるなか、最近では予約が取りにくい状況となっている。先端医療を提供しかつ研究教育機関である大学附属病院として、さらなる設備面での充実が必要である。

## 9) 本学附属病院における歯科医師臨床研修10年間の推移

### ー平成18年度から平成27年度についてー

○保田 稷<sup>1</sup>, 佐々木重夫<sup>1</sup>, 清野 晃孝<sup>1</sup>  
鈴木 史彦<sup>1</sup>, 渡邊 崇<sup>1</sup>, 成田 知史<sup>1</sup>  
佐藤 健太<sup>1</sup>, 佐藤麻里恵<sup>1</sup>, 北條健太郎<sup>1</sup>  
奥座 崇史<sup>1</sup>, 山家 尚仁<sup>1</sup>, 小松 泰典<sup>1</sup>  
瀬川 洋<sup>1</sup>, 杉田 俊博<sup>1</sup>, 山森 徹雄<sup>2</sup>  
(奥羽大・附属病院・地域医療支援歯科,  
奥羽大・歯・歯科補綴<sup>2</sup>)

【緒 言】歯科医師免許取得後に指導歯科医や上級歯科医指導の下に臨床経験を積む卒業教育である、歯科医師臨床研修制度が平成18年に必修化されてから10年が経過した。今回は本学の臨床研修状況を把握する目的で、10年間における各年度の臨床研修歯科医人数と選択されたプログラムおよび研修修了後の本学への在籍状況、研修医が担当した患者の症例報告会抄録集より症例概要および指導歯科医・協力歯科医について調査した。

【方 法】1. 各年度の人数と各プログラム(Aプログラム: 臨床研修の全ての期間を本学で履修する単独型研修, Bプログラム: 4か月を協力型研修施設で履修する地域医療短期研修, Cプログラム: 8か月を協力型研修施設で履修する地域医療長期研修)および研修修了後に本学に在籍した者の推移を検討した。2. 症例概要と研修医が施行した高頻度歯科治療の推移を検討した。3. 研修医に関わった指導歯科医・協力歯科医の専門分野について検討した。

本調査に関しては奥羽大学倫理委員会(第152号)の承認を得た。

【結 果】1. 平成18年から27年までに本学の臨床研修を修了した者は412名(男性335名, 女性77名), 本学出身者は395名(95.9%)であった。

2. 平成23年度および24年度では他の年度と比べて、BおよびCプログラムを選択したものが多く認められた。また、修了後の本学在籍者率では